

優秀賞

「月の石の指輪」

鹿内俊太

「月の石の指輪」あらすじ

種子島とあるイベントが開かれる日。自宅で昼飯を作ろうとしたサツキの元に、1本の電話がかかる。それは、幼馴染のヤマトからだった。料理をしながら片手間でヤマトの話聞くサツキ。スピーカーから漏れる調理音や昔話に話は逸れて、なかなか本題に入らないしびれを切らしたサツキが電話を切ろうとした時、ヤマトはサツキに愛の告白をする。しかし、昔から何度もヤマトに告白されて来たサツキには何も響かない、はずだった。今回はただの告白ではなく、プロポーズだったのだ。さすがに動揺するサツキ。だが、ヤマトの一生懸命な姿に惹かれ、プロポーズをOKする。ハッピーエンドに思えたが、ヤマトは突然大声で喚き出す。ヤマトはサツキが子供の頃に言った、「月の石をくれたら結婚してあげる」という約束を果たすため、ロケットに乗っていたのだ。そして、種子島から月へ向けて、ロケットが飛び立った。

リポーター「さあ、間もなく種子島から、日

本初となるチャレンジが始まるうとしていきます！ 現場では、炎天下の中、大勢の方がその様子を見届けているようです……」

お腹の鳴る音

サツキ「ご飯、作るかあ」

冷蔵庫を開く音

サツキ「ええつと、お手軽にそうめん。いや、待てよ。ハムにトマトにキュウリに卵。これは、アレ作るしかないんじゃない」

電話の着信音

サツキ「ちよつと誰？ タイミング悪すぎ……

……もしもし？」

ヤマト「……あつ！ サツキ？ 俺俺」

サツキ「オレオレなんて知りません」

ヤマト「ヤマトだよ。わかるだろ」

サツキ「ヤマトなんて知りません」

ヤマト「8歳で出会ってから20年経つぜ？」

サツキ「3年間も連絡なかつたら忘れるよね」

ヤマト「忘れないよ！ 少なくとも俺は、1

日たりとも忘れたことなんてない」

サツキ「じゃあ中学の頃、同じ部活だった人

の名前全員言える？」

ヤマト「当たり前だろ。サッカー部は絆が人

一倍強いんだ」

サツキ「アンタ、バスケット部だったけどね」

ヤマト「細かいことを気にするなよ。それよ

り、大事な話があるんだ」

サツキ「忙しいから切るね」

ヤマト「待って、ごめん。待って」

サツキ「今からご飯作るんだよね。食べ終わ

ってから掛け直すよ」

ヤマト「ダメ！ 今じゃないとダメなんだよ」

サツキ「ハア〜？」

ヤマト「5分……いや10分だけ」

サツキ「しよがないな……じゃあ作りながら

聞くから。スピーカーにするよ」

ヤマト「ゴメン、助かる」

コンロに火を点ける。

ヤマト「何作ってるの？」

サツキ「まずお湯を沸かします」

ヤマト「麺類か」

ザックザックとキュウリを切る。

サツキ「キュウリを切ります」

ヤマト「なんだか、心地いい音だ」

サツキ「で？ 何の用？」

ヤマト「ああ、ええつと……その、元気だっ

た？」

サツキ「普通かな」

ヤマト「普通か。そりゃ良かった。普通って

いいよな。普通が一番だ。普通最高！」

サツキ「そうだね」

ヤマト「うん……あ、俺も普通だったな。普

通に毎日過ごしてた」

サツキ「へえー」

ヤマト「……そう。あ、いや。ちよつと普通

じゃなかったかも」

サツキ「どつちよ」

ヤマト「どつちだろう……」

サツキ「仕事は？」

ヤマト「ん？」

サツキ「まだ種子島の宇宙センターで働いてるの？」

ヤマト「うん。まあ」

サツキ「子供の頃から宇宙好きだったもんね」

ヤマト「いや好きっていうか。それはさ」

サツキ「全然わからないな。宇宙の魅力」

ヤマト「え……」

サツキ「だって空気も音もないし、真つ暗な

んでしょ？ 無音で息苦しいだけのクラブ

じゃん」

ヤマト「ゴメン、クラブ行ったことないから

わからない」

サツキ「じゃあ、宇宙に行けるその日を楽し

みにしてな」

ヤマト「それが、今テレビでさ」

サツキ「静かに！」

ヤマト「えっ」

ジュワァーつと卵を焼く音。

ヤマト「たまご焼いてる？」

サツキ「そう。こればかりは集中しないと」

ヤマト「わかった。冷やし中華だ」

サツキ「ピンポーン」

ヤマト「いいなあ冷やし中華。俺、何年食べ

てないんだろ」

サツキ「毎年1回は食べなきゃダメでしょ」

ヤマト「だよなあ。ゴメン」

サツキ「誰に謝ってるの」

ヤマト「サツキの実家でよく冷やし中華食べ

たな」

サツキ「そうだったけ」

ヤマト「ウチで取れた小ぶりのスイカ持って

行つてさ。おばさん、全部同じ皿に載せち

ゃうんだもんな」

サツキ「あつたね。ゴマだれがスイカにも

べつとりついちゃつてさ」

ヤマト「それが意外とクセになるんだよな」

サツキ「あのおかげで、酢豚のパイナップル

も気にならなくなったよね」

ヤマト「そうそう！あと、ポテトサラダの

りんごとみかんも」

サツキ「それは許せない」

ヤマト「えっ、ゴメン」

サツキ「だから誰に謝ってるの」

ヤマト「いや……」

サツキ「ヤマトって昔からそうだよな。すぐ

謝っちゃうクセ、治した方がいいよ」

ヤマト「ゴメン……あつ」

サツキ「高校生の頃さ、クラスで窃盗事件あ

つたの覚えてる？」

ヤマト「うん。体育の授業中だった」

サツキ「私がサボるって言ったら、ヤマトも

着いて来たよな」

ヤマト「俺もサボりたかったんだよ」

サツキ「教室戻ったらさ。財布がないって大

騒ぎになって。私たち、すごい疑われた」

ヤマト「仲のいいクラスだと思つたのに。薄

情な奴らだよなあ」

サツキ「許せなかったね」

ヤマト「本当だよ」

サツキ「アンタだよ」

ヤマト「え？」

サツキ「私は誤解を解くのに必死になったの

に、ヤマトは勝手に罪被つて謝つたじゃん」

ヤマト「だって……そうした方が早く解決す

るだろ」

サツキ「そのせいで、卒業までずっとひとり

ぼっちになったじゃん！友達もみんな離

れて、大学の推薦も貰ってたクセにそれも帳消しになってさ。あのせいで、ヤマトの人生めちゃくちゃになったんじゃない」

ヤマト「そうでもないよ。その程度で切れる友情なんて要らなかつたし、推薦が取り消しになったおかげで、浪人していい大学入れた。それに……」

ズズつと鼻をすするような音

ヤマト「サツキ……もしかして泣いてるの？」

再び、ズズズつと鼻をすするような音

ヤマト「俺は……サツキの幸せが一番大切なんだ。サツキが苦しいと俺が辛い。だから泣かないでよ」

サツキ「ふおめん、ふあんふあいつふあ？」

(ゴメン、なんか言った)」

ヤマト「……もしかして、何か食べてる？」

サツキ「トマトかじってた」

ズズつとトマトを嚼む音。

ヤマト「へえ……ウマイ？」

サツキ「最高」

ヤマト「なら良かったよ……」

サツキ「じゃ、またね」

ヤマト「え、ちよつと待って！」

サツキ「そろそろ冷やし中華出来るから」

ヤマト「いやあのわかるけど。待って。落ち

着いて」

サツキ「ヤマトがね」

何やら英語で怒号が飛び交う。

サツキ「なんか慌ただしくない？ 何やって

るの？」

ヤマト「大丈夫！ 全然平気！」

サツキ「ならいいけど……」

ヤマト「いやー、そのー。なんていうか」

サツキ「うん？」

ヤマト「す、す、好きだ！」

サツキ「月？ ……ああ。今、生中継してる

ね。種子島からロケットが飛ぶんだって」

ヤマト「月もそうだけど。サツキが好きなんだ！」

サツキ「知ってる。幼稚園の頃から散々言われてきたし」

ヤマト「今回はマジなんだよ」

サツキ「今まではマジじゃなかつたって事？」

ヤマト「今までもマジだったけど！ 今回は

マジ中のマジ！」

サツキ「どうマジなの？」

ヤマト「結婚しよう」

サツキ「(吹き出し) マジ？」

ヤマト「幼稚園の頃の約束、覚えてる？」

サツキ「覚えてると思う？」

ヤマト「月の石で指輪を作ってくれたら結婚するって言ったよね」

サツキ「今はダイヤモンドの方が嬉しいね」

ヤマト「マジかよ。月の石は？」

サツキ「興味ないよ。そんなのよりダイヤモンド

ンド。給料3ヶ月分のやつ。欲しい。あ、

なんかめっちゃ欲しい。ちょうだい！」

ヤマト「え？ え？ 欲しいの？ 俺から？」

サツキ「他の人にもらって意味ある？」

ヤマト「俺が給料3ヶ月分のダイヤモンドの

指輪あげたら、結婚してくれるの？」

サツキ「いいよ」

ヤマト「ええ！？ なんで？」

サツキ「なんでって……」

ヤマト「だって、今までさんざんフラれて来

たし。脈ゼロだったし」

サツキ「お金ないしカツコよくないし趣味合

わないし？」

ヤマト「いいトコないじゃん……」

サツキ「でも一生懸命じゃん」

ヤマト「それだけ？」

サツキ「それ以外に何かいる？」

ヤマト「……ヤダ」

サツキ「え」

ヤマト「ヤダヤダヤダ！ 降りる！ 俺、降

りる！」

再び、英語で怒号が飛ぶ。

サツキ「ねえ……今、どこにいるの？」

ヤマト「サツキ！ 俺、そっちに行きたい！」

サツキ「だからどこにいるの！？」

ヤマト「ロケット！」

サツキ「ロケット？」

ヤマト「月！ 月！」

サツキ「好きなのはわかってるってば」

ヤマト「つ・き！ 今からロケットで月行

く！」

サツキ「はあ？ 何言ってるの」

ヤマト「だって、月の石くれたら結婚するっ

て言うから！」

サツキ「子供の頃の話でしょ！？」

ゴゴゴ、つとエンジンが点く。

リポーター「さあ、間も無くです。ここ種子

島から、日本初となる有人ロケットTS14

号機が宇宙へ向かって打ち上げられます」

サツキ「え？ え？ 嘘でしょ？」

ヤマト「サツキに嘘ついた事ある！？」

サツキ「ない。そこがいいところ！」

ヤマト「ありがとう！ 駄目だ、このベルト

外れない。クツソ、降ろしてくれー！」

サツキ「すぐ帰ってくるんだよね！？」

リポーター「今回のミッションは、人類が夢

見た月面基地の着工。その期間は、およそ

3年を予定しています」

サツキ「3年！？ 3年も会えないの？」

ヤマト「週に一度くらいは15分くらいテレ

「電話出来ると思う」

サツキ「プロポーズしておいて、それだけ？」

ヤマト「待つてくれるか？」

サツキ「……多分」

ヤマト「ウワアアアッ！ 嫌だーッ！」

サツキ「ウソ！ 待つてるから！」

ヤマト「もう婚姻届出しちゃおう！」

サツキ「どうやって署名すんのよ？」

ヤマト「宇宙から署名出来ないかな？」

サツキ「私に聞かないで！ 結婚式は？」

ヤマト「リモートでやろう！ 38万キロ離

れて結婚式なんて、きつと人類初だ！」

サツキ「なんかロマンチックな気がしてきた」

10秒前からカウントダウンが始まる。

ヤマト「もう、月の石はいいんだな？」

サツキ「い、一応拾って来て！ あとなんか

……とにかく頑張って！」

ヤマト「サツキー！」

サツキ「ヤマトー！」

リフトオフの掛け声とともに、ロケットがゴォーッと飛び立つ。

リポーター「点火しました！ T S ロケット14号機、種子島の澄み切った青空を突き抜けながら、宇宙へ向かって飛んで行きます。本日、人類は新たな一步を踏み出しました。宇宙飛行士たちの無事を祈り、3年後の帰還を待ちましょう。以上、種子島宇宙センターから中継でお伝えしました」

(了)